

栗郷土研究会報

No. 25

41. 7. 20
兵庫県栗郷土研究会
山崎町教育委員会内
栗郷土研究会
電話 750番

栗鉄山の経営者 (一)

鉄山師 千草源右衛門

宇野正 撰

☆

☆

栗鉄山の生産は、直接には技術の伝承者である「村下」に統卒された鉄山労働者集団の人びとの手でおこなわれたのであるが、鉄山の経営面はどんな人の手で支配されていたのであろうか。近世については若干の史料が見られるので紹介してみたい。

☆

☆

千草屋という屋号が示すように、千草郷が山崎に移住した家柄で、先祖は村上源氏に発する赤松氏の一族、平瀬姓を称した豪族であった。千草郷を支配し石堂カ峰九里尾城に住んでいたが、天正年間に豊臣秀吉が長水城を攻略した時に滅亡をまぬがれ、その後は帰農したものである。

◎ 初代 清 信 (性恩院相善源入居士)

目次

| | | |
|-------------|------|----|
| 栗鉄山の経営者 (一) | 宇野正 | 1 |
| 本多藩滞京日誌 (四) | | 5 |
| 山崎郷土館等竣工 | 横井怒一 | 8 |
| 大庄屋交替 | 栗山宗知 | 9 |
| 淡路見学旅行記 | 安井寅一 | 10 |
| 会員名簿 | | 12 |
| 雑報 (20) | | 12 |

(万治二年九月十六日歿年八十六才)

父を清正といい、長水落城の時に左手を失なつたため帰農し、九里尾城麓に住んだが、老後は浄久禅門と号し浄久庵に住み、慶長六年(七十四才)に死んだ。この跡を清信(源入)が継いたが、清信は六郎兵衛といつた。千草郷の家督は長男の重正(九郎兵衛)に譲り、次男保古(市郎兵衛)を伴つて山崎町に移住し、名を源右衛門と改めて鉄山師を始めた。これが千草屋の鉄山師の始めであつた。鉄山経営者として立つためには、相当の経済力を必要としたと思われるが、この経済力を証明する史料は欠いてい

る。推測すれば敗戦の武士が帰農し、土地を開拓してその地で豪農となつた例は多いから、田畑も相当に所有した地主的存在であり、資力を蓄積したと考えることも誤りではないだろう。時代的にはやや下るが、千草郷の平瀬家を継いだ重正（九郎兵衛）の孫、宇正（清右衛門、享保十一年十月死）が元祿十年には大庄屋を勤めているころからしても、前述の推測も可能だと考える。

清信（源入）が何時頃に山崎に移つたかは明らかでないが、千草郷の平瀬家を継いだ重正（九郎兵衛が寛永十九年に三十二才で死んでいることからして、寛永十年頃（重正の二十二才頃）清信（源入）六十二・三才頃と考えておきたい。山崎に移つた場所は、山崎町地詰帳の古檢（慶安三年）には、西新町に千草屋源右衛門の名が見えるので、西新町に山崎千草屋を創設したのであろう。彼は仲々の活動家で山崎移住後に生れた三男道閑（六左衛門）を大坂に出し彼自身も大坂に行き道閑を援助して大坂平瀬家も創設させている。このような非凡な活躍により、家運は非常に繁昌したと平瀬家の記録は伝えていゝる。

◎ 二代 保 古 （陽諦院称普貞把居士

延宝六年九月死

初め市郎兵衛と称したが、家督を継いで源右衛門と改名。鉄山経営に当つたのは言うまでもないが、山崎と大坂（二家）に分家を創設一族は繁栄した。

保古（貞把）の時代の請負鉄山は史料を欠くので全貌はわからないが、鍵掛山（延宝二年より四カ年間現波賀町原ノ滝付近）を銀六百枚の運上銀で、溝谷山（延宝五年より六カ年間現一宮町溝谷）を銀四百八十枚で請負っている。（千草郷鉄山は当然請負つたと考える）つまり、実粟郡全体の鉄山請負と考えてよいのではなからうか。

丁度、保古（貞把）の晩年（彼も晩年には大坂に出ている）は本多候入部の直前で、池田豊前守政周が三万石で山崎を領した時であるが、池田豊前守政周の大坂蔵屋敷が、中ノ嶋西信町にあり、留主居は老年替り、名代は天満不□川に住む伊勢屋九郎左衛門、蔵本、梶木町千草屋重郎右衛門という記録がある。この千草屋重郎右衛門は保古（貞把）の大坂在住中に生れた五男、十郎右衛門のことと考えられるが、別の記録によれば鉄問屋を営んだとある。大坂千草屋十郎右衛門は、実粟産の米と鉄の販売を行なつて巨利を得たものであろう。

又、同時期の大坂鉄問屋として、

出雲伯耆但州 道修町 川崎屋庄左衛門
備前 備中 一丁目

同 同 川崎屋次郎左衛門

同 同 川崎屋源兵衛

播磨 梶木町 千種屋六郎右衛門

舟町 尾崎屋久兵衛

中貫（カ）川崎屋源右衛門

中 貫 川崎屋忠右衛門

があつたが、多くの川崎屋に互して尖栗鉄の間屋を経営し十郎右衛門家と共に、生産と販売機構を同族で独占して、利潤をえていたのである。ただ千草屋六郎右衛門の名が平瀬家系には見当らず、道庵六左衛門の系統ではないかと思われる。

又、保古(貞把)六男保信(常有)も大坂にて分家大洲侯名代蔵元を勤め、代々、新右衛門を称した。三男、道安宗左衛門は山崎にて分家、代々弥四郎を称し、その子弥四郎(八右衛)は大年寄となつて一門はいよいよ繁栄をしてゐる。

◎ 三代 正 屋

涼薫院仙西居士
(元祿九年五月死)

保古(貞把)長男、山崎本家を継ぎ、源右衛門を襲名。父の跡、鉄山経営に當つたのであるが、文献を欠くので、ただ晩年家督を護つてのち、四郎左衛門と改名して、京、大坂に出、大坂にては二男保成(又四郎)に分家を立てさせたことがある。

◎ 四代 信 古

光岳院昭普如軒居士
(享保十五年八月死七十五才)

正屋(仙西)の長男、源右衛門襲名。手洗淵鉄山(享保二年より一宮町溝谷入口)と鷹巢鉄山(享保三年より千種町)の請負が新しく記録に見える。初代鉄山師清信以来の

鉄山経営により山崎千草屋も名実共に安定し、旧家を凌ぐ勢力を得た模様で、出石川(揖保川)の川船支配の権利も英質屋から千草屋に渡つてゐる(宝永三年)。

従来は他家支配の高瀬船で鉄その他の運搬をしてゐたものが、自家支配の高瀬船となれば、それだけ利益も多くなつた筈である。又、元祿十二年からは山崎町の大年寄(米屋竜野屋と共に)となつてゐる。

◎ 五代 信 節

実想院俊普良雲居士
(享保十八年九月死五十一才)

信古(如軒)の長男、源右衛門襲名、信節(良雲)の弟、保秀は延享元年に因州鉄山で死んでゐる。詳細は不明ながら、当然家業補助のため出向いていたのであつて、尖栗鉄山師は遠く、山陰の因幡まで手を延ばしてゐたことが知られ、千草屋一族の中には、もつと多くの人々が、各地に派遣されて、家業を分担してゐたのであろう。

◎ 六代 布 古 (正行院修普道山居士)

山陽盆

壺阪酒造有限会社 (電六三)



教科書、雑誌、参考書
文具、和洋紙

志水成文堂

本町通(電五四七)



布古(道山)は信節(良雲)の弟で、父が京都に出て死んだ跡を継いで居たが、山崎に帰り兄の跡を継ぎ、源右衛門を称した。

現在、平瀬家に保存されている「千草屋手控帳」(題目がないので筆者が命名した)は、実粟鉄に関して唯一のまとまった参考文献とも言つてもよい貴重なものであるが、布古(道山)が心覚のため書き残したものと推定している記載年次は享保初年のももあるが、元文元年頃から宝暦三年頃までに及んで最も詳細である。

記載内容は多岐に及んでいるが、千草屋請負鉄山名、請負運上銀額、鉄砂採取地名、たゞら吹きの入費(出費)、鉄山の生産高、鉄値段の変遷等諸般の事項が、タテ七種、ヨコ十六種の横袋綴の小型帳面に細字で丹念に記入されている。実粟鉄山史研究上から、布古(道山)の名は忘れることはできない。

同時に、布古が手控帳に記載しなくなつた前後から残念ながら、千草屋の家運も次第に斜陽の道をたどつて行つたらしい。

寛永二年には「上納筋延引のため大年寄役を取り上げ」られ、宝暦六年には「千草屋、不如意」となり「鉄山稼き難く、家財土蔵封付け」となり、有力原鉄山(波賀町)、齊木鉄口(波賀町)を鳩屋に譲り渡している。宝暦八年には「千草屋身体限り仕り退参申候。京都に退き、宮遣い之由」と急激な瓦解をとどけてしまつた。同九年には東河内鉄山を、同十年には天小屋鉄山(共に千種町)を湊屋徳兵衛が、同十年赤西鉄山(波賀町)を鳩屋孫右衛門が請負りことになつた。

☆

☆

豊臣秀吉の中国征伐による、中世地方武士階級没落の時期に、刀を捨て地方豪農にいち早く転換し、更にその蓄積した財力を利用して、在郷商人に進出し、地方と大坂に一族を配した血縁的財閥にまで伸展した千草屋ではあつたが米価高騰、金銀改鑄等、経済界の変動に抗し切れず、百年にわたる鉄山師も遂に、新勢力と交代することになつてしまつた。

(四十一、五、二十三 稿)

明治元年

本多藩滞京日誌

(四)

御近習頭

柴田小膳
手記

◎ 一月十二日

一、四ツ半時御供揃年始為御回礼左の御方様へ被為入候、尤御着服御上下御供廻り例の如く三騎に御候へ共余り御人少に付御不都合も有之に付今日は御先式人御脇式人御増被成候

◎ 一月十三日

一、明十四日御当番御参内被仰出例の通り夫々申達候

一、今日御在所表より御中間一人着御火事具持参り候に付御用状到来

◎ 一月十四日

一、例刻御供揃にて御参内、例刻御帰館相成候

◎ 一月十五日

一、今朝御中間御在所へ帰り候に付一昨日の返書相認御近習頭へ差送候、尤一昨日御鳥屋の雉子一羽、殿様より若様へ被為進候に付為御答礼吹田くわへ一包被為進候

一、山岸横内先達て御内用にて上京の処最早格別御用向も無之に付明十六日当地発足御在所へ御帰し被成様仰出され候

一、此度若殿様御上京の処御人少にて毎々御出も有之に付

御供方は別に太儀を思召、且又御参内等総て御都合克為濟候に付御心祝のため一同へ御酒下さる事尤一統御呼出て被下候処御間狭に付代料を以て被下置候、右は唯々思召より被下儀に付近習頭より夫々頭支配へ申達し吟味所に於て代料相渡候事

但し蛇勢隊以上へは一朱づ、

積水隊へ五百文づ、以下は総て二百匁

◎ 一月十六日

今日山岸横内出立の所昨日松井連忌に付何か相談も有之候に付一日延引明十七日出立候様被仰出候

◎ 一月十七日

今日御在所 大殿様為御名代馬場勘左エ門を御仮建へ御使者の事

但此度女御入内為在候御歎被申上候事

明十八日四ツ半御供揃にて御出勤被仰出夫々申達候

◎ 一月十八日

今日御出勤の所殊の外大雪に付御延引被仰出夫々申達候明朝同御当番に付六ツ時御参内被仰出夫々相達候

今朝三日月様より公用人御使者にて、御隣藩の義兼て御懇意にも相成居候へ共、尚此度御多敬御約御結相成候上は幾久敷御懇親被成下度、別て御家来に至る迄万事御親敷御願思召候、依て干鯛一箱御樽料金五百疋被進候旨申来る、就右同時に此方様より同口上にて御取替え御品同様に御送

被成候、御使者八九郎勤之、御使者へは御双方共御目録金
貳百疋づ、取計候事

右表向の御取替せ相濟候後、今朝は御多敬御取替首尾よく
相濟御大慶思召候、且又明朝は当地御発途の趣に御承知被
遊候間、御見立旁交肴一台被進候旨御小納手御使者にて被
仰出候岡橋一江勤之

同刻三日月様より御側使者同様の口上にて先刻の御挨拶
旁御交肴一台被進候旨被仰越候、早速小膳御披露中、上御使
者に面会御挨拶の口上申述候

◎ 一月十九日

今日御当番に付御参内被遊御料理等御頂戴にて酉上刻御
帰館被在候、公用人老人にて御差支に付佐川、武問へ助勤
被仰候

◎ 一月二十日

松井連義御用向も先づ見止相附候間今朝下坂致させ候事
此度御再幸の上大小候伯四月中旬に東京へ一被召候段御
沙汰有之候に付御内評の上左の御口上書今朝公用人を以て
御差出相成候御仕事小膳之を勤む

御口上書写

旧臘御帰郷の趣承知仕り父肥後守病氣に付私儀早々上京
仕候所、奉伺天機且当番等も被成候に付難有仕合奉存候、
実は去春已来千才騒擾の際出兵等も奉願、朝恩の万一た



り共奉報度有念に御生候へども、何分山身微力如何共、心
に任せず遺憾に奉存候、追て東北御勘定に付ては今般御再
幸被在大小候伯其他迄東京へ被召、輿論公議を以て御国是
を建られ候に付四月中旬を限り東京へ参着可仕首奉畏候、
就て古河迄に東下仕候義に御座候へ共同卒右御再幸の節供
奉前後の内へ御加へ被成下乍聊小藩相応の人数相率ひ御供
仕候様被仰付度、只管奉懇願候は甚だ不分の義御座候へ共
前条宿志の一端をも相償度尺寸の微志御憐察被成下、願の
通り被仰付被下候へば重々難有仕合に奉有候

御名御書利

弁事御中

◎ 一月二十一日

今日御廻勤被仰出候処雨天に付御延引相成候

◎ 一月二十二日

今日無別条

◎ 一月二十三日

明二十四日六ツ半時御当番に付御参内被仰出夫々相達候
 関伊勢守様より御使者を以て左の御書付御廻達、並に御
 口上書添相成候 写

来る二十五日、御誓約被為在候に付午刻参朝可有之候也
 但着用有位は衣冠無位は直垂の事

正月二十二日

弁 事

追て早々廻覽廻り留より可有返上候也

右に付早速同様の御口上書相添、織田摂津守様へ致廻達候
 尤表御使者は執政より御達にて委細は当役より申達候事、
 御使者武間年之助相勤候

一、脇坂淡路守様へ御着京御歛且御滞京中御見舞旁御小納
 戸使者を以て御菓子一箱(代三百疋)持参武間相勤候

◎ 一月二十四日

一、今朝例の通り御衣冠上げ三人罷出六ツ半時御供揃御参
 内被為在候、夕酉刻御帰邸被為在候、
 但御供廻り例の通り

一、今日軍務官御用人より御呼出有之差支に付佐川、武馬
 公用人代にて御供被仰付候事

一、明二十五日四ツ半時御出被仰候、例の通り相達

一、植村釧八郎様御義今日御叙爵被為在、備前守様と、
 宣下被為在候趣御側使者にて右御歛被仰出候、尤早々御
 在所へも可被仰出旨被仰出候、御使者西村米次郎へ申達
 候

◎ 一月二十五日

一、四ツ半時木筑俊之介罷出御衣冠の上例の御供にて御参
 内被遊御誓約も御首尾能く被相済同酉下刻御機嫌克御帰
 邸被遊候

一、脇坂様より此間進物の為御答礼杉折一箱御到来の処只
 今御納戸より返書相認御不在中に付御帰館の上御披露可
 申旨御小納戸より返書相認め候

◎ 一月二十六日

一、今日大沢侍従様へ御側使者にて御菓子一折被進候武間
 源三之れを勤

一、今日御在所より二十四日出し候間便着の処、若殿様御
 義此度御上京にて万事御首尾能被遊御勤、大殿様には御
 老年別て年来御疝積にて御難義思召殊に今度東京へも被
 為候(共御馬上御勤回は別て御難被遊候に付御隠居に
 て御家督御譲り被為度思召候帰申来り、則御執政と御同
 道にて御目通相願申上候処同じ思召も不為在候に付早々
 御近親様方への御相談御口上書を以て明朝倉橋孫太郎御
 使者相勤候様被仰出候

◎ 一月二十七日

一、今日植村羽前守様被為入八ツ半頃より御酒宴にて夜五
 ツ半頃御帰り相成候

但し為御土産蒸菓子壹箱御到来に付御帰の従是も御餅
 壹折被為進候、且又御手袂に付総て御供帰りに相成候へ

共、御供頭一人外御用にて被閑居下宿に被机居候間、廉末の御酒も可被下の処御手狭の義に付目録金貳百足取計候事、尤源三懇意の由に付御小納戸より取計候事

一、今二十七日午刻非蔵人足公用人御呼出にて左の書付御渡し相成候 写

本 多 肥 前 守

今般致上京候段御満足に被御思食候、然る所列藩来る四月中旬限東京へ罷下り候様被体出候に付速に御暇を可賜の処御模様有之大儀乍ら東京御出輩迄滞京一の致旨被仰出候事

正 月 行 政 官

御同様御滞留の方々付

高松黒田肥前肥後芸洲姫路岡崎松代

平戸岡 〆て十一藩

◎ 一月二十八日

一、今日御在所への間便差出候事

一、御隠居御家督御願御進達書公用人を以て弁事務所へ御差出相成り北村源治と申人落手の由

一、明日五つ前御出被仰出夫々例の通り相達候

◎ 一月二十九日

一、今日御当番に付五つ前御供揃にて御参内被遊候

但し御供揃例の通り御着用御直垂御一騎の事

(以上全文終り)

新鮮な食料品
なんでも揃います

杉本商店

山崎町伊沢町
でんわ 469

山崎郷土館等竣工

かねて建築中でありました山崎町文化センターが、山崎小学校北校舎跡に完工し、去る七月一日完工式が挙行されました。

| | |
|---------|--------|
| 青年婦人研修所 | 一三六平方米 |
| 図書館 | 一〇六平方米 |
| 郷土館 | 九七平方米 |
| 便所 | 五平方米 |
| 玄関 | 五平方米 |

右の建物が同時建設されたもので、図書館は下村記念館から移転、広く、明るく、落着いて読書が出来るようになりました。図書館あとは小会合用に改造され、公会堂として有効に使用されます。青年婦人研修所は日本間あり、洋間あり、各種設備も充分で青年婦人の修養、健全な娯楽の

場所として町民に利用され喜ばれることと信じます。

郷土館は本会が中心となり、その実現を熱望していたもので、その建設は本会として誠に喜びにたえません。目下展覧、陳列品の置場であるケース等の内部整備に努力して

いますが、その経費は有志の方々の募金を仰いでいます。資金の目途もつきましましたので近く設備完了予定です。

陳列予定品は郷土（本郷）に関係ある出土品、本多家秘蔵品、八幡神社等社寺宝物類、民間所蔵品などで、山崎関斎木像、本多家武具、古文書、銅鐸、八幡神社古文書、楽器類内定しており、一般秘蔵の郷土関係物を委託出品下さるより切望します。勿論、二つとない貴重品ばかりですので、管理には万全を尽すつもりであります。近く郷土館運営委員の決定ある筈で、郷土館完備の上は郷土の認識を新にし、観光価値も充分果せるものと確信します。

(横井記)



吟味した精肉
うまいコロッケ

くもて

本町
TEL. 664

大庄屋交替

栗山宗知

嘉永二年（一八四九年）九月十八日に山崎藩の大庄屋松井太郎太夫（段組）が退職して今宿の三木伴助が大庄屋に就任した当時の文書があつたので紹介してみる。

大庄屋役今宿村伴助江被仰付

但し御会所玄関之間に罷出候

段組松井太郎太夫役設也

組替之儀者同役中誤之上同出可様被仰付候

御請奉申上候事

右に対し家老、奉行、代官、金元、山方吟味方、勘定方へ栗山儀右エ門と伴助同道で挨拶に廻つた。組替は庄又右エ門が出動しなかつたので後廻しとなる。

覚

一、今宿村伴助江大庄屋役被付候間村々承知之上庄屋年寄説に可罷出候、尤も小前末々迄此段致承知様猶又差名之者は改名可致様為御触可成候

一、組替之儀も可仰出候間近々取極の上御連可申先づ夫迄者御用向万端伴助方御申出可有之候

九月十八日

以上

栗山儀右エ門
又右エ門

各種自動車
鍍金と塗装



伊藤 拉播社

TEL. 810
夜間 311

段組同村々江 相達申候事

右の通知をして二十日に大庄屋三人で組替の相談をなし
代官所へ届出でて認可をうけ、二十一日に各村々へその旨
を通知している。組替後の各組村々は次のとおり。

神谷組

大庄屋 栗山儀右エ門——神谷、中、矢原、岸田、高所
庄能、上寺、横須、下牧谷、生谷、上牧谷、片山、下町、
三津、野

高下組

大庄屋 庄又右エ門——高下、市場、加里、門前、山崎
春安、段、鶴木、中井、金谷、千本屋、下広瀬、山田、木
谷

今宿組

大庄屋 三木伴助——今宿、中広瀬、船元、御名、上比
地、中比地、川戸、宇原、下比地
なお各村庄屋は神谷——又四郎、中——新兵衛、矢原——

為右エ門、岸田——要之助、高所——喜七郎、庄能——
七郎右エ門、上寺——庄次郎、横須——弥四郎、生谷——
利助、下牧谷——庄兵衛、片山——卯蔵、上牧谷——助太
夫、下町——万四郎、三津——治郎七、野——嘉平
高下——新十郎、市場——孫八、木谷——忠蔵、加生——
六郎平、春安——同人、門前——伝四郎、山崎——武平、
段——与平治、鶴木——竹蔵、中井——平治郎、金谷——業
三、千本屋——梶五郎、下広瀬——庄七、山田——利八——
今宿——伊八郎、中広瀬——善七、船元——孫十郎、御
名——甚治郎、上比地——己之吉、中比地——平九郎、下
比地——条治郎、川戸——太作、宇原——九平治

淡路見学旅行記

安井 寅一

本会が神話に包まれた夢の国、淡路島へ足を伸ばす企画
を立てたのは昨年五月でしたが、出発の日フェリーポート
のストの為中止となり、地駄ふんだが、海の上はどうにも
ならず、昨年中はねむつてしまいました。本年五月に再び
此企画をやり直しまして二十二日と決定。出発の日に暴風
雨でフェリーが欠航したので一方ならずガツカリしました
が、何とかして今年淡路の夢を実現したく、更に六月十
九日に決行する事に致しました。梅雨期と農繁期で気をも

みましたが、イヨイヨ当日となり今度は神姫バスのストにあいました。しかし同社の幹旋により遠く鳥取より日の丸バスが来てくれましたので、出発が出来ました。朝霧の多い天気でしたが幸に風なく、三度目の計画には天も憐みを下さつて第一班は山崎五時発車、第二班第三班は七時三十分発車で三台の観光バスで百六十名が発せしました。

明石港よりフェリーでなつかしの島へ渡ります。一行は車を出て甲板に上りめずらしそうに青い海を見て喜んで居ました。そして近く世界で三番目長いとか言われる海上夢の架橋の実現も中々に大変であるといつづく実感するのでした。岩屋にある伝説多き絵島の麓を歩き、幾百年波に削られた奇岩がつくんつくんと立つ中に、白い波が寄せて居るのも豪壮そのものであつた。我等の車は志筑町より右折して三十分位い走ると多賀町の伊柴諾神社の前に着く。参道老松が並んで神々しい。神社は平地にあるが元淡路の一の宮で又官幣大社でもあつた。境内広く清掃行届き島第一の神威を拝せられた。境内にて記念撮影などした。元の道を海岸に出て舗装せられた国道二十八号線で、海の景色を満喫しつつドライブ気分は申分ない。車は一路南下して由良の町を通り阜頭につく。城ヶ島旧要塞地帯を眼の前にして遠くは紀州を望む美しい景色に一同満足でした。車を州本へ戻して千鳥狂の門前に着く。ここは県医師会の保養所で一同休憩させてもらう。風雅の表門をくぐると

樹木の庭で本館と別館に各班が満員となつて昼飯をした。青芝の広庭に池あり岩あり、更に正面に青葉若葉の巨樹が鬱蒼と繁つた山を背景として申分のない泉庭であつた。ここから一筋に町を下つて行く海岸に出る。松林の白砂の広い海岸にはところどころ茶店もあり、貸ポイントもあり、音楽も流れて居て遠浅の美しい海を前に梅雨晴の日光を仰ぐのは実に幸福であつた。かくし海のうまい空気を腹一ぱいに一行は蛸の跳る頑具など買入れて楽しそうに元の車で二時すぎに発車、岩屋へ戻つてきた。フェリーに乗船するには一台づつ分乗せねばならぬので自分の車は第一に乗船して明石着五時すぎ。サーピスに明石城跡を一周して帰路につき、車中では新しい唄、古い民謡など陽気にはしやいで無事山崎へ戻り、淡路行の念願をやつと果した嬉しさでいっぱいでした。

町大町山崎

石原 ボ-リング

営業案内

- (1) 各種自動車
エンジンボ-リング
- (2) バルブ研磨
- (3) クランク更生
- (4) シリンダーボ-リング
即日仕上

會員名簿 20

| | | | |
|-----|-------|-----|--------|
| 伊沢町 | 萬木喜代子 | 北魚町 | 塚本たみ |
| 大才町 | 西谷幸子 | 〃 | 小林うめ |
| 門前 | 前川滝太郎 | 城下 | 長谷川庄二郎 |
| 河東 | 織金政一 | 〃 | 嶋田かめ |
| 神野 | 大西秀行 | | |

雜報

○ 本郡安富町では、新町発足満十年を記念して「町勢要覧」を発行。二十八頁で写真を多枚掲載、七月一日に記念式典を挙行。功労者表彰などを行なった。なお同町は「花とほたるの町」として全町花いつばいと蛍の人工繁殖に力を入れている。

○ 年中行事として有名になつた山崎さつき会のさつき展覧会は六月五、六兩日下村記念館で開催。遠来の客も相当あり、苗木即売も好調であつた。当日は日本間で小西竹太郎氏彫刻展及び水石展を併せ行なつて好評であつた

○ 県立山高教諭宇野正茂氏は、郡内の鉄山資料をまとめられ、近く刊行される予定でありますから御期待下さい。

○ 県立伊和高校の地区班は、郡北地方の古墳図作成に着

手。波賀町で調査中、落窪でノミ一、直刀一、土器十三を発見、有賀で土器、装身具、皆木の住居跡で弥生式中期土器、マガ玉など出土したとのこと。

○ 同伊和高校教諭前田昇氏は一宮町で古文書二千点あまりを長持から発見、大体延宝七年から明治七年までと推定され、庄屋記録で農民生活など民政資料として貴重なもので、同氏は整理して全部を写しとりたいとのこと。

○ 別掲のとおり郷土館竣工により、その内部設備費の一部にと本会より金三万円也を寄附することに決定しました。

○ 本会秋季見学旅行は、九月十八日に予定されています見学地については目下選定中で後日御通知申しますから多数御参加下さい。

○ 郷土館の内部展示場は近日完備しますから是非本部関係資料御所持の方は、委託出品下さいますよう。

各種酒品洋料和食

八百福商店

山崎町山田
電話四三番